地域密着型ハンドボールクラブにおける
総合型地域スポーツクラブの役割
～三重バイオレットアイリスの事例研究～

生涯スポーツゼミナール　1214098　多田　美子

１．研究動機・研究目的

現代の日本では、生涯スポーツという観点から総合型地域スポーツクラブの需要が増えてきている。文部科学省からの委託を受けて日本体育協会が総合型地域スポーツクラブの設立・発展を推進している。

ハンドボールは日本ではまだまだマイナーなスポーツであり、ハンドボールを知らない人や聞いたことはあっても見たことがないという人が多いというのが現状である。日本にはハンドボールのプロリーグは存在しない。１番高いレベルにあるのはＪＨＬ（日本ハンドボールリーグ）で、企業チームを中心としたアマチュアのチームが力を競い合っている。ＪＨＬの女子リーグで活躍する「三重バイオレットアイリス」は、総合型地域スポーツクラブを母体として活動しているチームである。このチーム以外にも、ＨＣ名古屋、飛騨高山ブラックブルズ岐阜、（広島メイプルレッズ）も同様の形態で活動している。（広島メイプルレッズは今後総合型地域スポーツクラブの役割を増やしていく方針のチームである。）

今回は、まだまだ人気の出ていないＪＨＬで、まだまだ人気の出ていないクラブチームが、総合型地域スポーツクラブを母体にクラブを運営していくことで、どのように発展していくことができるのか考えていく。今後、日本の生涯スポーツを支えていく柱となる総合型地域スポーツクラブが、地域に密着した活動した活動を理念に掲げるクラブチームに、どのような影響をもたらすのか検証し、安定した経営を目指すチームの向かうべき方向を指し示していきたい。

２．研究方法

NPO 法人三重花菖蒲スポーツクラブを母体として活動しているハンドボールチームである、三重バイオレットアイリスを対象とする。

三重バイオレットアイリスの監督である櫛田亮介氏に電話でインタビュー調査を行い、電話のみでは聞き取りきれなかった部分に関しては、後日メールにて質問を行い、回答を得た。三重バイオレットアイリス監督・櫛田亮介氏には、今回、卒業論文を作成するにあたり協力してほしいと打診し、研究内容を伝え、了承を得た上で協力頂いた。

まず、大きな前提として、櫛田亮介氏は監督であり、運営のプロであるＧＭではないことを踏まえた上で、電話でインタビュー調査を行った。

３．主な結果と考察

今回の結果から考えられることは、地域とクラブチームの関係性が何事においても重要になってくるということである。地域密着型のチームであるわけだから当たり前かもしれないが、どの項目においても、考えが行きつく先は必ず地域との関係になった。人気を向上させるにも、経営を安定させるのも、まずは地域との関係を良好に保ち、絆を深めていく必要がある。そのためにもチームに魅力がなければならない。このチームに協力したいと、地域の人々や企業に思ってもらえるような魅力が必要である。三重バイオレットアイリスには十分に魅力があるように感じた。更新率の高いＳＮＳツールでの投稿は、選手の笑顔が溢れていて、時にはファンの人々の笑顔もあったりして、自然と応援したくなるようなものが多い。選手の人柄や、チームの雰囲気の良さがにじみ出ている。「会いたいクラブ★宣言」というスローガンにぴったりのチームであると感じた。チームの魅力は十分にある。残る課題は、ハンドボールの認知度、チームの認知度の向上である。どちらも時間は必要になってくるが、今後も地道な告知活動を続け、ハンドボールが、そして三重バイオレットアイリスが少しずつ広まっていってほしい。そのために、誰でも自由にスポーツ活動に参加できるという総合型地域スポーツクラブの役割がどのように利用できるのか、模索していきたい。まずは地域のスポーツが好きな人から。続いて、健康のために運動したいと思って総合型地域スポーツクラブを利用しようと思っている人。このように、だんだんと地域の人々に広まっていくのが理想の形だと考える。

４．結論

本研究では、総合型地域スポーツクラブを母体として活動している「三重バイオレットアイリス」を対象に、日本ハンドボールリーグに参戦するチームのクラブ化の現状と課題について検討を行った。その結果、「地域密着」をコンセプトに総合型地域スポーツクラブへ移行するメリット等を明らかにすることができた。なお、今回の調査では、まだまだ情報が足りないこと、調査期間が短いこと、現地の認知度などの状況がわからないこと、ファンを含め地域の方々の声を聴いていないことなど、不足点が多く、具体的な結果にたどり着くことができなかった。今後、時間をかけて調査をする機会があれば、上記に挙げた不足部分も含めた調査を行い、具体策を提案できるような結果を導きだしたいと思う。

５．卒業論文の執筆を終えて

自身が約 10 年間続けてきた“ハンドボール”と、2 年間のゼミナール活動で主に学んできた“総合型地域スポーツクラブ”の、関わりと今後の可能性について自分なりに考えることができ、大学生活の学びの集大成となったのではないかと感じています。

本研究の調査を行うにあたり、快く協力をしてくれた櫛田監督、また、櫛田監督との連絡を取り次いでくださった高校時代の先輩である佐野陽子選手に心より感謝申し上げます。チームが魅力的なのは、監督の人柄と魅力に集まってきた選手やスタッフが作りあげているからだと感じました。今後の活躍に期待し、陰ながら一人のファンとして応援させて頂きたいと思います。また、本論文の作成にあたり、ご多忙の中、多大なご支援と適切なご指導を頂いた黒須充教授に深く感謝申し上げます。